

「保育」の原点 95

育児の神様 内藤寿七郎博士の言葉(16)

とあと追いをする赤ちゃん

文 葛西得男 text by Tokuo Kassai

生

後1年を過ぎたころからお母さんが頭を悩ますことのひとつに、あと追いがあります。ようやく家の中を自由に歩き回れるようになった子どもは、お母さんのあと追いをするようになり、家中を付いて回ります。トイレにまで付いていくことも珍しくありません。

赤ちゃんにとつてこの時期は不安がわきやすいときで、この不安を免がれたいため、お母さんにもくっついていようとすののです。また、積極的に自分以外の親しい人間を求める心の芽生えとともに自分を守ってくれる人、愛している人から片時も離れたくないという思いがわくのでトイレまで追ってくるのです。

それを冷たく「待っていないさい」「うるさいわね」と叱ると、赤ちゃんはきつと悲しい気持ちになるでしょう。おまけにトイレから出たお母さんが、泣いている子どもに「付いてきちゃダメと言ったでしょう。聞き分けのない子ね」と叱ったらどうでしょう。

「付いてこないで」だけでも裏切られたと思っているのです。

育児の原理

内藤寿七郎博士著

内藤寿七郎著

内藤寿七郎著「育児の原理」

そのうえ「聞き分けのない子」「ダメな子」とお母さんにダメ押しされれば、いつそう突き放されたと思ひ込んで一段と泣きわめくことになって、母と子の良い関係を築くこ

とができません。

もつともお母さんにすれば、家事に育児に忙しい最中、トイレにまでもあと追いをされるとついカッとなって叱ったり、イライラしたりすると思います。あと追いはほんの二期期のもので、この時期のお母さんは、ゆとりを持って赤ちゃんの希望をかなえてやってください。

指一本握らせてトイレへ連れていき、もし中まで入りたいたと言ったら一緒に入ってください。付いてきたつてちつともかまわない

ではないですか。付いてきてそばで見てもいいではないですか？こうお願いすると、あと追いの要求をいちいち満たしては子どもの自立心が育たない、と心配するお母さんもいるでしょう。

しかしそれは逆です。

子どもはかなりの年齢に達するまで、お母さんに依存しながら、少しずつ自立していきます。幼いうちは、この度合いが非常に強いのです。子どもの自立心は、お母さんが自分を受け入れてくれたという自信から芽生えます。

あと追いつける子どもに「また付いてきて。ダメだと言っているでしょう」という叱り方を続けていると、子どもは自分を愛し守ってくれると信じていた人から裏切られたように思い、自信を失って、自立心の芽生えが遅れるのです。



Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人松福会理事長に就任。松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。アップリカ葛西副社長時代に国連環境計画（UNEP）のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。

例えば、親の「待っててね」という希望に応えられるのは2歳を過ぎてから、「待ちなさい」としつけの形で親のいうことを聞き入れられるのは3歳を過ぎてからです。これは二応の目安ですから子どもによつてはもろろ早い遅いがあります。

しかし、親子の平和な関係が続いているなら、2歳ごろには「待っててね」、3歳ごろには「待ちなさい」を聞き入れられるように育っているはずだ。

お母さんはこの1歳の子どもの要求をかなえてやるくらいゆとりを持ってほしいと思います。赤ちゃんにつきあいなながら「いつになったら待ってくれるのかな」と子どもの自立を待ち望むお母さんのやさしさがその後の育児にも大きなプラスになるのです。

「育児の原理」—あと追いをする赤ちゃんより